

# J・A・コメンスキー 「地上の迷路と魂の楽園」を音楽劇で

大 梶 優 子



子ども達の通う芸術学校の先生から紹介をうけて、コンサートの切符を手に入れた。プログラムの第一部は、合唱とオーケストラ演奏、第二部は、ヤン・アモス・コメンスキーの文学作品「地上の迷路と魂の楽園」の音楽劇とある。すべて、芸術学校の生徒達の出演による。いわば子どもコンサートである。

プラハ市民は、十区に分かれていて、各区に芸術学校があり、小、中学校および高校の生徒達が、課外活動の一つとして通っている。この第二部のプログラムは、プ

ラハ八五区の演劇科とプラハ八十区の伝統民族楽器演奏科の合同で企画され、解説によれば、文部省主催の芸術学校のための全国大会で、第一位になったという。

会場は、プラハ八十区の文化の家「エデン」日本では、地域の文化会館といったところである。市の中心街と違って、二〇世紀に入ってプラハ市となった周辺地区は、どこも似たようなコンクリートの箱の連なりで、超モダン、能率、便利さの中に身を置くと、遠く異国に住むことが意識されなくなる。バロックやロココの文

化は、すばらしいとは感じながらも、やはり私の日常にはなっていないようである。親を同伴した子供達や若者達の間に、私も娘と並んで席をとる。金曜日の夜となれば、二日間の週末休暇を前にして、気持ちのやすらぐひとときである。周囲の人々の表情にそれが見えるし、またそれを話題にしているのが耳に入る。家庭の団らんの場合、そのまま会場に移って来たようなごやかなくつろいだ雰囲気である。そんな中で、入り口で手渡されたパンフレットを読む。

「地上の迷路は、幾何学的にきちんと構成されてはいても、どこか不自然で、喜びの感じられないような生活空間で織り成された空想の世界である。この迷路の世界に、若い巡礼が新しいよりよい世界を求めてでかけて行く。彼は、『万能透視』と『あざむき』という二人の案内人の助けを借りて、さまざまな身分や職業の人々の様子を眺める。各々の場面は、二種類の歌で表現されている。その対比は、現実と、『あざむき』

に借りたバラ色の眼鏡を通して見えた光景との対比でもある。人間社会の無秩序や偽りに満足できず、巡礼は、目の前の世界から心の平安と平和に価値を置く魂の世界へ逃げ出す。

最後の場面では、コメンスキの原作から離れ、巡礼は歓喜に満ちた仮面達に迎えられる。それは、自分の理想と理性と行為を統合して生きようとする若者達の歎びとエネルギーを象徴している。

第一幕―世界遍歴の理由について

巡礼は、「万能透視」を案内人にする。

導き役に「あざむき」が加わる。巡礼は、「手綱」と「眼鏡」を受け取る。

巡礼は、高い所から世界を眺める。

幕間―「運命」が、職業を分け与える。

第二幕―巡礼は、結婚した人々の様子を眺める。

巡礼は、職人と学者の世界を眺める。

聖職者達のにぎやかな世界

巡礼は、支配者の世界、兵士達の世界につい

て考えさせられる。

第三幕―巡礼は、地上の世界から逃げ出しなくなる。

巡礼は、故郷にたどり着く。

フィナーレ

演劇配役

主役（巡礼、万能透視、あざむき）

脇役（運命、死、聖職者達、騎士達、哲学者達、鍛冶

屋達、陶工職人達、どろぼう達、縫い娘達、洗濯

女達、料理女達、行商女達、町民達、夫婦達、恋

人達、修道僧達、兵士達、結婚祝賀参列者達）

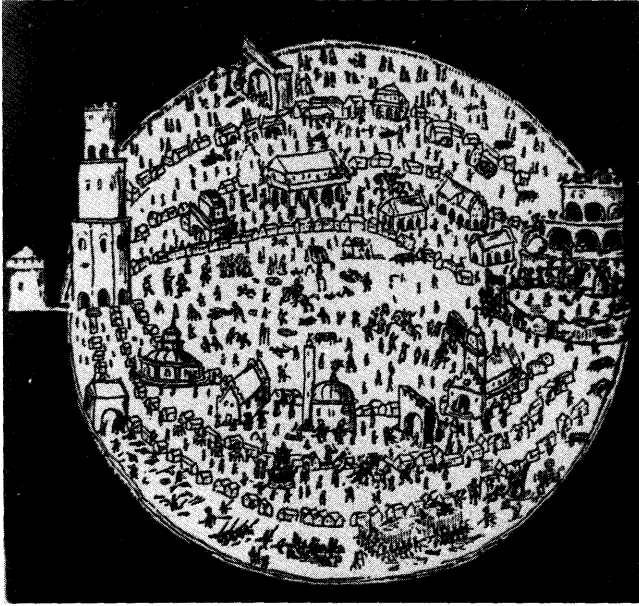
「伝統民族楽器演奏および合唱部」

第一部のプログラムの後のにぎやかな休憩時間が終わって、観客席の照明が消え、舞台上のスポットライトの輪の中に、中世を生きる若者が立つ。身近な世界に見える人々の悩み、社会の矛盾を自らの問題にして、世界遍歴を決意するまでの独白で、音楽劇が始まる。幕が上がり、遍歴を共にする二人の案内人が順次登場する。少

し時代がかった調子の会話の中で、「手綱」が手渡され、「眼鏡」が手渡される。町の広場の高い所から、人々の様子を見ることにしようとして、三人が舞台を降りて行く。明るくなった舞台を覗く私の目は、もう「巡礼」の目と重なっている。

単純な裁断によるデザインの衣装をつけた人々―子供達の群舞の間を、白いゆったりとした衣装の「運命」が巡って、人々に職業を定めていく。各々の衣装の下に隠し持った小道具を次々に取りだして、様々な職業人に変身していく。ルネッサンス時代の民謡のメロディによって、舞台上の人々の波が揺れる。素朴な明るさをもつ歌の調べとは対照的に、人々の表情は暗く生氣がない。宿命づけられた職業を、決まったやり方で遂行しているというように見える。

コメンスキーが自ら描いたといわれる「地上の迷路」の図を思い出した。人間の世界を風刺したものである。丸く描かれたその町だけに光があたって明るく輝き、まわりは闇である。町の一方には「生命の門」、他方には



「分岐の門」がある。岩の上には、「富貴の塔」が建っている。二つの門をつなぐ六本の道は、身分や職業を象徴する。家族、商人、学者、聖職者、支配者、兵士である。

巡礼は、六種類の職業につく人々の様子をバラ色の眼鏡を通してながめる。どれも歪んだ形で表現された異様な姿である。それから結婚しようとする人々は、お互いに相手の全体を見ることがせず、身体の部分をくまなく測ったり、ポケットの大きさやさいふの重さに一喜一憂したりしているし、職人の仕事場では、精一杯の努力があるにもかかわらず、飲びではなく、苦痛や悩み、危険があふれている。教育の場では、消化を考慮に入れずに詰め込むことに専念し、そこを首尾よく通りぬけた学者達の世界は、混乱状態にある。聖職者達は、民衆から金銭を集めて欲得の限りをつくし、にぎやかに暮らしている。支配者は、「聴く耳をもつ」かのように長い管を持ってはいるが、民衆の声は途中でもれて実際には聞かない。武器を道具にして働く兵士達は、人々の生命や

財産を破壊し、同時に自分達も負傷や死と対面している。

こうした人間の世界を、舞台上の子供達は、それぞれの役に応じたバントマイムで演じていく。「いったい何のために。」「それでどのようにして。」と問いかけたくなる観客の気持ちを受けけるように、巡礼と二人の案内人が舞台上に登場して、その気持ちを言葉にする。十七世紀に生きたコメンスキーの人間世界批判の声が、コンクリートの劇場に広がって、私達の頭に滲透してくるといふわけである。

二人の案内人と分かれた巡礼は、心の平和を求めて「魂の楽園」に向かう。たどり着いたところは、生まれ育った故郷。フィナーレのカーニヴァルの場面は、現在でも村々にみられる民族的、土俗的な趣向をこらした謝肉祭のお祭り風景である。動物の仮面をつけ、色彩豊かなりボンの飾りをなびかせてダイナミックに踊る子供達や若者達の様子が、理想に燃えて未来を創り出そうとする、現在のこの国の人々の姿と重なって印象深い。お

そらくこの練習をしていた頃は、舞台上の上のことはあくまで舞台の上でしかなかったのだろうという思いが頭をよぎる。

一旦下りた幕が上がって、出演者が舞台に勢ぞろいする。舞台のそでに立った指揮者に花束が贈られる。その花束は、主役の手に渡され、順々に出演者全員の間を巡る。拍手が続く。一つの作品を演じきって充実感を味わう出演者達も、声援を送る観客達も、単に十七世紀の世界に浸っていないことだけは確かである。原作から離れたフィナーレの躍動は、そのまま現在の生活のそれであるから。

帰りのバスを待ちながら、「音楽劇は、おもしろかった。」と、娘が言う。私が以前に原作を読むように勧めたり、時代背景を説明しようとしたりに関心を示さなかつたのを、敢えて思い出させるような話しぶりである。音楽劇という表現のおもしろさ、世界遍歴の物語のおもしろさ、三百年以上も昔の人々のくらしが舞台で

再現されたことのおもしろさなどを明るく生き生きと話して、「あの古い本を、私も読んでみようかな。」と、ポツツと付け加えた。

「あの古い本」は、「地上の迷路と魂の楽園」のスコヴァキア語版である。小さな療養所の町に住んでいた頃、人から譲りうけた。教育的配慮から親が買ってくれたけれど、一度も読まなかったとその人は苦笑した。二十年以上も本棚に眠って、外国人の私が初めて目を通すことになった。全頁を使ったさし絵がかなりたくさん入り、登場人物達が奇怪な世界に二十世紀の衣装をつけているのを無気味に感じたが、読み進んでいくうちに、その内容が現代の人の世界に通じるものであることがわかり、ようやく納得できたのを思い出す。

後になって、この作品が一六二三年、三十年戦争の間の国内逃亡中に書かれ、コメンスキーを初めとする同胞教団の信徒達を擁護したジェロチンのカレル伯に献呈されたことを知った。

生命の危険にさらされて隠れ住みながら、人間世界を

みきわめ、人の在り方をみつめて書かれた作品の重みだけを強く感じてきたように思う。演劇にしやすい構成や表現形式をもつ文学作品としての「おもしろさ」に気づかされたのが、今回の音楽劇であった。

(ブラハ在住)